この作品は推敲していない未完成のお試し版です。

製品版にはふりがな記入、表紙絵、挿絵が入る予定です。

プロローグと一部で、雰囲気や世界観をお楽しみください。

娼婦の蜜沼　（お試し版）

式　フロン

プロローグ

野太い声が響き、酒瓶が打ち鳴らされる店内。
騒がしい酒場の隅で青年は一人ため息をついた。
「はぁ」

なじめない場所というものは、いるだけで疲労を覚えてしまう。
親が爵位を持つ青年ジェド・レイアートは、不機嫌を表すようにテーブルの下でかかとをコツコツと踏みならした。
身なりのいい服に整った端正な顔のジェドは、周囲の武骨な男たちに比べて一人だけ明らかに浮いていた。

品のある装いと周りをさげすむ傲慢な雰囲気。
一目で貴族とわかるジェドの周りには、避けるように人のいない空間ができている。
ただ貴族が纏う、特有の傲慢で張りつめた雰囲気もこの騒がしい店内ではのまれるように影が薄まっていた。
故意か無意識か騒ぎ立てる店内の男たちは、ジェドが目に入らないかのように楽しそうに盛り上がっている。
唾をとばしゲラゲラと笑う酔っ払い達を、見下すような目で眺めながらジェドは学友の誘いで飲みに来たことを後悔していた。

平民が集う夜の騒がしい酒場。
数人が座れる角のテーブル席で、一人で寂しくワインボトルを持ちグラスへとそそぐ。

そそがれたぶどう酒の色の薄さと、強いアルコールの香りに顔をしかめた。
貴族の会食で出るぶどう酒とは比べものにならないほど、質の悪い酒だと一目でわかる。

ジェドは悪酔いをしそうなその酒を、苛立ちをぶつけるかのごとくゴクリと飲み干すと、にらみつけるように店内を見渡した。
アルコールにむせそうになるのを我慢しながら、この状況を作った連れの学友達を目で探す。
自分の側にいた二人の学友は店について早々、かわいい娘がいるとはしゃぎながら、ジェドの制止をふりきって席を立っていた。
目をこらすとどうやら店内の雑踏に紛れて見えにくいが、二人はカウンター席の女店員を口説いているようだった。
「・・・くだらない」
怒りのこもった声で一人つぶやく。

学友二人は商人の跡取りの平民で貴族ではない。
そのためジェドとは違い庶民の酒場でも雰囲気にとけこんでいた。
学内ではいつも媚びをうって腰巾着をしている二人が、貴族である自分を無視して女の尻を追いかけている姿にはあきれ果てる。
やはり気まぐれとはいえ、平民に付き合って遊ぶべきではなかった。
そもそも、貴族が平民の店に行くことなどめったにない。
この酒場に来たのもしつこく誘われたから仕方がなく付き合っただけなのだ。
平民を知るための機会だとか、接待をするからと必死にゴマをする二人の頼みで渋々飲みに来ただけだというのに・・・

誘っておきながら自分を蔑ろにする二人の態度に怒りがつのる。
学内であれば、怒鳴りつけているところだが、さすがに初めての酒場、しかも庶民しかいない場所ではそれもはばかれた。
ジェドはイライラと安酒をあおりながら店を出ることも考えたが、早々に平民から逃げるように帰るのは貴族のプライドが許さなかった。
せめてこのボトルを開けてから、二人に絶縁を言い渡し店をでようと決め

ると二杯目のぶどう酒をグラスに注ぎ込んだ。

「おひとりかしら？」

しばらく安酒と格闘していたジェドの近くで鈴をならすような声が聞こえてきた。

辺りの雑談が弱まり店内の騒がしさが薄れる。

周囲の注目を感じながらゆっくりとジェドは顔をあげた。

いつの間に近くにいたのかわからない、眼前で立つ女を眺めると顔をしかめた。

「だったらなんだ？」

その女は露出の多いぴっちりとした青いドレスをまとい、見下ろすようにこちらを見つめていた。

肩まで伸ばした銀髪に、艶のあるピンクの唇。

腕をバストの下で組み胸部を強調させたしぐさ、全身からただよう色香から一目で商売女だとわかる。

片方の目が前髪で隠されており、残った切れ長の左目が愉しそうにジェドを見つめている。

ぱっくりとあいた露骨な胸の谷間に目を奪われそうになるが、ジェドはそれを悟られないように目を細めた。

貴族という人種からすれば、このような性を売る低級な女は侮蔑の対象にあたる。

この場から立ち去れという意思を込めてにらみつけると、女は隣へスルリと座り込んだ。

「お、おい！」

「あなた、貴族様かしら？」

思わず焦った声を出したジェドの鼻孔に甘い蜜のような香りがひろがっていく。

無遠慮に身体を寄せる女の艶めかしい存在感に面食らった。

「あ、あまり近づくな、無礼だぞ！」
「あら？」

慌てて体を離して、怒鳴ると女はわざとらしく両手を前に出して触っていないとでもいうように、肩をすくめた。
「貴様、娼婦だろ」
糾弾するように、吐き捨てると女の目が糸のように細くなった。
「だとしたら、なんだというの貴族の坊ちゃま？」

否定せずに挑発的な声色でそう返した女の言葉に、周囲が静まりかえった。
ジェドは驚がくで目を見開く。
平民にここまで、あからさまに挑発をされたことは今まで一度もない。
この国で貴族にたて突けば最悪、死刑もありえるのだ。
怒りよりも先に驚きでかたまっていると、女はグラスの縁を軽く指先で撫で回すとゆっくりと視線を静まりかえった周囲へとめぐらせた。

〝コツン〟
女の爪先が、グラスの縁を軽くたたくと軽やかな音が鳴り響いた。
すると、動向をうかがうように声を静めていた周辺の客達が、かわいた笑い声を一斉にあげると、少しずつ雑談が再開される。

ジェドが驚愕から覚め、怒りを覚えだした時には、辺りはすっかり元の騒がしい喧噪を取り戻していた。

生まれて初めて平民に挑発をされた衝撃で、ジェドはこの周囲の異様な動向に気がつけなかった。

「僕を・・・、貴族を馬鹿にするのか女？」
ふつふつと沸く怒りに、威圧するように隣の娼婦をねめつける。
テーブル上に置いた右手が、自然と拳をかたどった。

「！」
強く握りこまれ小刻みにふるえる拳に、ツーッと冷たい女の指先がはった。
「ふふっ、ごめんなさい」
女の指がなめるように拳を撫で回すと白い手が重ねられる。

「あまり高貴な方とおしゃべりする機会がないの、イヤミな言い方に聞こえたかしら？」
拳がほぐされるように、やさしく揉まれジェドは一瞬言葉につまった。
「あ、ああ、無礼だとは思わなかったのか？」
ひんやりとした手が包むようになでる感覚に言葉の勢いもそがれてしまった。
ゆっくりと、解すように、女の指がかたまった拳を上から何度もなで回すと、ジェドの頭から少しずつ怒りがひいていった。

「そうね、よく見たら坊ちゃまじゃなく、立派な殿方ね」
ねっとりとした声で、女はささやくとじっと目がのぞき込まれた。

こちらの真意を見通すような翡翠色の瞳にジェドは飲まれそうな色香を感じ、慌てて目をそらし握られた拳を軽く引いた。
「ま、まあな」
すべてを取り込みそうなほど妖しい瞳に自然と身が引けた。
まるでそれを予測していたかのように、女は引かれた拳の上から手をどけずにさわってくる。
手がテーブルから離れる前に、女が拳を握った。

「高貴な方と、おしゃべりしてみたかったの」
甘えるような声で距離を詰めてきた女にジェドは、のまれそうになりながらもなんとか手を離して距離を取った。

「待て近すぎる　言っただろ、気安く触るな」
露骨な女の誘惑に流されそうになったがこのように、こびるような態度をとる女は、はじめてではなかった。

貴族というだけで、言い寄ってくる女は学内でも多い。
その経験からここまであからさまにされたことで、逆に冷静な思考を取り戻すことができた。

女の甘い声に、ジェドはあらがうように一度深く呼吸して頭を落ち着かせた。
「ふん、売春婦というのはここまであからさまなのか？　これではマヌケな男どもしか相手にしてもらえないぞ」

自分を貴族だと知っているのに、女の色香を使って露骨にモーションをかける娼婦などたかが知れている。

蔑むように語るとグラスを持ち、グイッと一口あおった。
怒りこそなくなったが見下す感情は自然と侮蔑へと変わる。

そんな尊大な態度にも、女は表情を変えずにほほ笑むとボトルを手にとってグラスへとついだ。
「色香で惑わされるほど、レイアート家は安くない」
無言で酒をつぐ女に、軽く酔いが入ったジェドは自身へと言い聞かせるように言い放った。

「レイアート家・・・、まさか侯爵様？」
女は軽く目を見開くと、口元へと手を当てて驚きをあらわにする。
どこか芝居がかった挙動だったが、酔いのまわってきたジェドはそれに気がつくことはなく得意げに胸をはった。

庶民とはいえ、自分の一族を知っていることに口が軽くなる。
「そうだ、まあ僕ではなく父親だが・・・、いずれ後を継いで爵位はもらうさ」
尊大に言い放った言葉だが、それには確固たる根拠があった。
この国では、貴族は生まれで決まる。
大きな戦や、革命がなければ爵位は家督とともに世襲で継がれていく。

将来、侯爵になることはほぼ確定していた。

ジェドはレイアート家の跡取りとして育ってきた。
そのため家では、使用人やメイドなどに甘やかされて生きてきた。
生まれた頃から屋敷暮らしで世間をあまり知らなかったジェドは、学内以外のこんな酒場でも爵位が理解できる女に気がよくなっていった。

「では、侯爵様と呼ぼうかしら？」
だが笑顔でそうからかってきた女に、ジェドは鬱陶しそうに手を振った。
「はぁ、そういうわざとらしいおべっかは嫌いなんだよ」

邪険にするように言った言葉だが、顔にはどこか女を責めて楽しもうとする嗜虐の表情がみえた。
最初こそ娼婦など相手にせずに追い払おうと考えていたが、たまには、庶民をいびって遊ぶのも悪くないという思いがにじみ出る。
疎外されたような一人酒よりは、商売女をからかう酒のほうが幾分かましだという気持ちがジワジワとわきあがる。

「じゃあ、いじわるな貴族様は、どんな女がお好みなのかしら？」
そんな考えを分かっているのかいないのか、女は笑みを浮かべてジェドの好みをたずねる。

「ふん、まずは高貴であることが最低条件だな、後はそうだな・・・」
いい感じで酔いもまわりはじめ高揚したジェドは、傲慢な貴族の性が顔をみせて本性があらわなっていった。

「僕を立てて楽しませてくれる女が好みだな」
言外におまえにそれができるのか？　とでも言うように意地の悪い笑みを浮かべて女を睥睨した。
「浅ましい媚びたおべっかを使わずにな！」
皮肉を超えてもはや罵倒するようにそう言い放った言葉に、女は小顔を軽

くかたむけて薄く笑みを浮かべた。

「あら？　私にぴったり」

「なんだと・・・」

女がうろたえるところを楽しもうとしていたが、予想と違う動じない態度に低い声がもれた。

「ふふっ、何かしらその顔は？　私、男をタたせて楽しませる玄人なのよ？」

鼻白んだジェドに、女はゆっくりと顔を寄せると、耳元へ唇を近づけた。

「女が怖いのぼ・う・や？」

「なっ！」

周りに聞こえないくらい小さくささやかれ、テーブルの下で貴族の太腿に指がスルリと流れ込んだ。

「き、きさっ」

「威張り散らしてもわかるわよ、この青いニオイ」

耳の後ろ首筋に女の鼻が近づきスンッと音をたてる。

「未経験、女を知らない香り」

「ひっ、おまっ」

耳縁を湿った感触がはしり、思わずうわずった声がもれた。

「ねぇ、こんなところで、寂しくいじけてないでもっと愉しいことを経験させてあげようか？」

耳をぴちゃりと舐められると、股の近く股間の根元にするすると細い指がはい回りなでさすった。

女性経験がないことを見抜かれ耳元でささやかれながら誘惑される。

娼婦の思わぬ反撃に思考がかき乱された。

同時に経験したことのない妖しい感覚が、股間に這い回り耳朶を吐息がくすぐってくる。

怒りを感じる間もなく、流れ込む甘い言葉。

「貴族でも、体験ができないキモチいい遊びしてみない？」
露骨すぎると頭の隅で考えるも、股間に血がな集まるじれったい感覚に、すぐに体を離して拒むことができない。

「やめっ・・・ろ」
小さく反発の言葉を発したジェドに、耳元の唇を離した女がゆっくり顔をのぞき込んできた。
「怖じ気づいたのかしら？」
指先だけが、未だ股間付近をヘビのようにはいまわっている。
「なにをっ」
娼婦の挑発に反射的に怒りがあふれ、凄もうとした瞬間、股間に甘い快楽がはしった。

豪華な装飾の腰止めの下、タイトな肌のこんもりとした膨らみを女の指が二本挟むように揉み込む。
人差し指と小指で持ち上げるように膨らみを刺激する。
直接生殖器を愛撫される感覚にジェドは悶えた。

「おっきくなってる、ふふっ、気持ちがいいでしょ？」
「ううっ・・・っ」
思わず出した喘ぎ声を、途中で飲み込み辺りを見渡す。
かなりの声量を出してしまい、周りの民衆に聞かれてしまったのではないかと焦る。

だが、ジェドの心配とは裏腹に、店内は不自然なほど先ほどと変わらず。
酔っぱらい達が、大げさに騒ぎ立てていた。
その様子に心底安堵する。
それでも女の股間への愛撫は止むことがなく誘うようにうねっていた。

「・・・貴様、わかっているのか？」
気持ちよさに耐えながら、最後通告をするように精一杯声を凄ませて、女をにらんだ。

「わかってるわ、貴族様でもこういうことが大好きなんでしょ？」
しかし、その言葉に女はまるで意に介さないように、軽く受け流し刺激を続けたまま軽口を返す。

本当に、相手を止めたいならば大声で叫び力尽くで止めればいい。
しかし、それをするほど不快ではなく、どこかに快楽に身をまかせそうになる自分がいる。
まるで鍛えられてこなかった甘っちょろい理性では、女の指先に抵抗できない。

それを見越しているのか、女は挟み込んだ股間の盛り上がりの真ん中を中指でこすり上げた。

「っつぅ！」
（き、気持ちいい）
ジェドは心の中で快楽を認めてテーブルの下に顔をうつむかせて女の指をみてしまった。
白い女の指が、自身の黒い布地の上で艶めかしく動いている。
盛り上がり張りつめたその中心を細い中指が線をひくようになんどもツーツーッと往復する。
そのたびにじれた感覚が、股間を張りつめさせていく。

すべての意識を股間に向けてしまったジェドに、追い打ちをかけるように、女体がからみつく。
肩をまわすように腕が、首筋に巻き付けられ胸元へと垂れ下がる。
顔がくっつくほど密着すると、頬の近くで吐息が感じられた。

脳髄を刺激する甘ったるい香りとともに鼓膜がふるえた。
「一緒に遊びましょ、お店でもっといいことをしてあげる」
同時に、おいでおいでをするように、もりあがりが指先でなで上げられる。
耐えきることの難しい甘い誘惑に股間がいきりたつ。

だが、ジェドは、持ちうるすべての理性をかき集めるようにして、顔をうつむかせて拳を握り抵抗の意思をみせた。

その耳元で女はそそのかすように甘い言葉をささやく。
「大丈夫、秘密にするわ・・・、これは今日だけの愉しい蜜事」
「ぐっ、しかし・・・」
胸板をなで上げるようにさすると、密着を強めて豊満な身体を押しつける。
「貴族様だもの、特別に無料でいいわよ」
「い、いいのか？」
女の言葉に思わずジェドは食いついてしまった。
貴族である自分にとって、別にお金などいくらでもだせる。
そこに抵抗があったわけではない、ただ貴族のプライドをたもつ言い訳が欲しかった。

「もちろん、こちらからのお誘いなのよ？」
誘惑に負けて金を搾り取られる庶民とはちがうというプライド。
「しょ、しょうがない・・・」
頼んできたので、仕方なく付き合ってやるという建前を得て、

「そう、ただ、庶民とお酒を飲むのと変わらないわ、ちょっと気持ちよくなれるだけ・・・」
「そうだな、少しだけなら、付きあっ・・・てやる」
甘い女の誘惑に、ジェドはからみとられた。

「ありがと、じゃあ行きましょうか、キモチのいい場所へ」
「はうっ」
そうささやき股間を強めにもみ上げると、女はあっさりと席を立った。
その予期せぬ力強さに、思わず声をあげると背筋が伸びる。

振り返りもせずにさっさと店の扉へと歩いて行く女に、硬直したジェドは慌てて立ち上がり後を追う。

股間の盛り上がりを、悟られないように不自然に前屈みになりながら歩く姿は、貴族の立ち振る舞いとは思えないほどだらしのない姿だった。

店の出口にあるカウンターで酒代を払おうとすると、近くで飲んでいた、二人の学友がおそるおそる近づいてくるのが見えた。
ジェドが声をかけるより先に、そのうちの一人、細身の青年が口を開いた。
「ジェド・・・」
「ちっ、勝手に席を離れやがってっ」
目を踊らせるようにしながら、話しかけてくる青年に悪態をつく。
「ごめん・・・、ここは僕たちが出すから・・・」
わびるように酒代をおごると提案した学友を一瞥すると、傲慢な態度で鼻をならす。

「ふんっ」
(次に会ったときが縁切りだ、せいぜい気を揉んでいろ)

申し訳ないことをしたと、思っているのか気落ちした様子の二人をみてここで絶縁を言い渡すことはやめてやることにした。

それよりも、早く女についていき続きをしてもらいたいと言う気持ちのほうが先立っていた。

「あっ」
ジェドが、歩いて女の待つ扉へと行こうとすると学友が何か呼び止めるように腕を前に出す。
それを、完全に無視してジェドはその場を後にした。

・・・だがもう少し注意してみていれば気がついただろう、学友は、ジェドではなく女へと手を伸ばしていたことに。
ジェドの後方から、薄く笑う女に見つめられていた二人の学友が常に下半

身をもぞもぞとくねらせていたことに。

「いくぞ」

「ふふっ」

おごらせたことで自分の権威を見せつけられたと勝手に満足したジェドは、威勢を取り戻すと先に扉を開けて店をでる。

後から出てきた女がゆっくりと扉を閉めると、唇に笑みをたたえ蠱惑的な表情でささやいた。

「じゃあ、行きましょうか私の娼館へ」

そう言って歩き出した女に、ジェドははやる気持ちを抑えられず、早足でその後をついていった。

一日目　　指おもらし

「ふふっ、そこのベッドで待っていてね」
女はそういうと、部屋を出て行った。
想像以上に広く優雅な部屋へと案内されたジェドは、その中央にあるキングサイズのベッドの上に言われるままに腰を下ろした。

案内されたのは、レイアート家の屋敷ほどではないが、貴族の住まいと比べても遜色のない立派な館だった。
庶民の繁華街にこんな豪華な屋敷があったことに面食らう。

だがそれよりも驚いたのは屋敷に入った瞬間、両脇に整列していた正装をした男女がお辞儀をして出迎えたことだった。
館の使用人や娼婦達が総出でお迎えをする光景に、この女がただの娼婦ではないことに気がついた。
場末の一介の娼婦だと思っていた女は、どうやらこの娼館を取り仕切る支配人のような立場だと想像できた。

思えば、ただの娼婦にしては異様に気品があり身なりが整っている。
なるほど、金持ちを相手にする高級娼婦だったかと、納得したジェドはそわそわとした気持ちでベッドに腰掛けていた。

窓を覆う刺繍のあしらわれたカーテン、部屋をともす色とりどりのランタン。
そして中央で自分が腰掛ける天蓋付きの大きなベッド、まるで王室のような内装に貴族の自分でも気後れしてしまう。

周りでは娼婦と入れ替わりに入ってきた数人の女たちがなにやら準備のようなことをしていた。
女中のような女たちは、お香のようなものを焚き、木制の作業台に小物を並べている。

落ち着かない心をおさえて平然を装いながら、その行動をみていたが、しばらくして作業が終わったのか、女中がドアの前に整列した。
一斉に黙礼をすると、速やかに部屋から退出していった。

〝コンコン〟
間を置かず小さなノックの音が聞こえ、ガチャリとドアが開いた。
「お待たせしたわね、じゃあはじめましょうか」
女がゆっくりと入ってくると、黒の短いドレスの裾をつまんで婦人礼をした。
「リィネよ、ここのオーナー兼遊女をしているわ、よろしくね」
改めてそう、あいさつをした女にジェドは言葉を失った。
酒場の時も、相当な色気を感じた格好だったが今の女の恰好はそれを上回る情欲をそそるものだった。
バストとヒップが見えそうな黒の短いドレス。
露骨すぎるようないやらしい下着の上から見えそうで見えないギリギリを隠す。
下品さを感じない、品のある匂い立つような色香が漂ってくる。

染み一つない真っ白な肌が、異様に艶めかしくうつりジェドは、ゴクリと喉をならした。
そんなジェドを、おかしそうに眺めながら、リィネは部屋の周りを回るようにしながら、部屋のランタンを消していった。
光量を調整するように、間引くようにランタンを消すと、残った光で薄い赤色の世界が部屋に映し出される。
なんともいえない淫靡な雰囲気ができあがり、ジェドの呼吸がはやくなっていった。

「なるほど支配人だったか、貴族とつながりを持ちたいわけだ」
緊張を悟られまいと、努めて平然を保つように考えを口にする。
冷静ぶったその言葉に、リィネは無言でほほ笑んだ。
「でも、悪いが僕からこの娼館になにか益になることをするつもりはないぞ？」

恭しくもてなされる状況に、不安を覚えクギをさすように言う。
下々たちの間で勝手に、レイアート家を後ろ盾にされてしまい当主である父に知られてしまえばただではすまない。
いい思いをさせたからと見返りを求める輩はどこにでもいる。
そういった自分たちを利用しようとする者達を、冷酷に切り捨てるのが貴族の責務だとジェドは思っていた。

だがそんな懸念をからかうように、リィネがゆっくりと近づくと、
「ただ、キモチよくなるのに、ずいぶんと小難しいことを考えるのね」
囁きながら、顔を寄せて前髪をすくように撫でた。

顔半分を覆う鈍く光る銀髪、その反対側の切れ長の目がまるで獲物を捕食する前の猫のように細まる。
暖色の光に照らされ間近で見るリィネの表情に、心臓がドキリと跳ね上がった。
「ここでは、そんな難しいことを考えてはダメ・・・、甘い夢の世界に連れて行ってあげる」
歌うように小さくささやきながら、リィネの細い指先が頬をなでていく。
その指先が、あごから首筋そして胸元へ降りていく。
ゆっくりとマントの留め具をはずすと、スルリと身体から落としシャツのボタンへと手をかける。
その流れるような手慣れた動作に、ジェドはほうけたようにかたまっていたが、ボタンを外す指先に慌ててわれに返った。
「お、おいっ――」

肩をつかむと、リィネは指をジェドの唇へと押しつけて微笑んだ。
「ダメ、ここからは私に身を任せなさい・・・」
どこか、抗えない妖しい色香とともに命じられ、うなずきそうになる。
「いや、だが・・・」
ただ、貴族としてのプライドが小さな抵抗を覚えずにはいられなかった。
いいよどむジェドに娼婦が首を傾けてささやく。
「なら、リードしてくれるかしら？」

うつむいて葛藤するジェドに、リィネは胸の谷間を見せつけるように近づけると、胸元の裾をつまんであおいだ。
「！」
からかうような笑みで、胸が見えそうで見えないギリギリでピラピラとめくる。
黒い布と白い肌の間で、薄く光る汗。
匂い立つような強烈なフェロモンが鼻孔をくすぐった。

オスの劣情を煽る誘惑、しかしジェドは動くことができずにいた。
性欲だけが異様に高まり、体温が上昇する。
これまでの性経験のなさから、女を主導する手順に自信が持てず固まる。

理性ではなく気後れ。
庶民なら浅ましく本能のままに襲いかかったかもしれない、しかし貴族という自尊から女に恥をかかされたくないという思いがあった。
端的に言えばジェドは臆病で、そしてそれを――、
「ふふっ、しないなら、私がやってあげる」
すべてが見透かされていた。
うつむいてかたまった貴族の青年を、まるで子供のように操りながら服が脱がされていく。
クスクスと小声で笑いながらシャツのボタンを外すと、耳元で腕を上げるようにささやかれる。
「いいからだね・・・」
無言で腕を上げると、袖をたくし上げられて上着の最後の一枚が脱がされた。

リィネは丁寧にシャツを折りたたむと、カゴの中へとしまい裸の上半身をじっくりと眺めた。
赤い薄明かりのなか、中央のベットで身体を晒した貴族の青年は経験したことのない羞恥と心細さを感じた。
室内は暖かく、上半身を脱がされても寒さを感じることはない。
それでも、身をふるわすように身体が縮こまってしまう。

その、胸元へ白く細い指先がスッと這わされた。
「っっん」
身を固めたその胸元、乳首を軽く指がこすりそのまま流れるように指は、身体を降下する。
胸からお腹へとなで回しながら、その手はズボンの縁、留め具の装飾へとたどり着いた。
カチャカチャと留め具が外される音が響く。
お腹の締め付けが、緩んだと感じるとリィネの顔が耳元へと近づいた。

「お尻を浮かせなさい」
脳に直接命令されるような張りつめた言葉に、反射的に腰がういてしまった。
なぜこんなにも、素直に女の命令を聞いてしまうのか、自分でも理解しがたい感情に戸惑う。
気づけば、ジェドの下半身はすべての着衣が脱がされていた。
全裸で棒立ちになっていると、リィネは自身の唇に曲げた人差し指をあててクスクスと笑みを浮かべていた。
「これが、本当の貴族様の姿ね」

全身を値踏みするようなその眼差しに嘲笑の空気を感じてジェドは羞恥から一転ふつふつとした、憤りがわいてくるのを覚えた。
「なっ、お、お前も早く脱げ！」
我に返るように慌てて股間をかくして叫ぶ、

その言葉にリィネは、笑みをうかべたまま軽く首を横に振った。
「焦らないで・・・、まずは身をゆだねなさい」
悠然とした態度で、ジェドの提案を一蹴するとゆっくりと身体を近づけて微笑みかける。
場を支配するような底知れない色香に圧倒されて言葉に詰まる。
「だ、だが・・・」
「ほら、ベッドにうつぶせよ、気持ちよくなりたいでしょ？」

身を剥かれて女のいいなりになるのは、屈辱がある。
「肌の味を知る前に、もっと美味しくなれる下準備をしてあげる」
それでもこの状況で娼婦を主導できる経験を持ち合わせていない。
抵抗を感じるが、今は身をまかせるしかない。
後で、肌を合わせたとき絶対にヒイヒイと鳴かせてやる。

心の中で屈辱を晴らすことを誓うとベッドの中央へ移動して、渋々うつ伏せになった。
「くっ、しょうがないな・・・」
言い訳するようにつぶやきながら、全裸でうつ伏せになる。

その背にクスクスと笑う声が浴びせられ羞恥と屈辱が増す。
望まない状況に我慢をするように身体を硬直させていると、腰にふわりと布が被せられた。
臀部を布で覆われ羞恥が薄れると、微かな甘い香りとともに、リィネが腰の横に座ったのがわかった。
「ふふっ、大丈夫みんなやってることよ」
母性を感じる、安心させるようなささやきと共に、首筋にスリッと指先がふれた。
「ひっ」
想像以上に、冷えた指の感覚に身体が小さく跳ねた。
「かたいわね、まずは解さないと・・・」
鈴を鳴らすようなつぶやき、同時に首筋に肌温度をなじませるように両手の指が絡みついてきた。
あごの輪郭を持ち、首の筋肉を緩めるように両手で固まった筋をこりほぐされる。
首筋から肩にかけ手を、親指で指圧されながらもまれていくと胸元から緊張が抜けていく。
「そう、ゆっくりと息を吸って」
言葉で誘導するように呼吸をうながされると自然と呼吸が深くなっていった。
うつ伏せで大きく息を吐くと呼吸にあわせて、首から肩が指先で揉まれて

ほぐれていく。

「いいわ、ほぐれてきた・・・、ずいぶん気を張っていたのね」
頭上から低い落ち着いた声にささやかれ、上半身から力がぬけていく。
丁寧に何度も首筋と肩を指圧でほぐされて気がラクになっていった。

（う、うまいな・・・）
娼婦のほぐす技術に気持ちまでゆるまされていく。
その手付きに素直に感心したジェドの頭には、感じていた屈辱や羞恥は完全に消えていた。

「いつも、気を張りつめてるのかしら、背中もかたいわ」
気遣うようなささやきとともに背中へと指先が流れていく。
「はああっ」
背骨から外側へ沿うように指先が背筋を揉みほぐすと、吐息と一緒に声がもれた。
「はっ、いい気持ちだっ・・ぞ」
「そう？」
もらした声をごまかすように褒めると、素っ気ない返答をされる。
「くっ」
自分だけがまるで夢中になっているように思えてジェドは歯がみした。

背中から腰をゆっくりと指圧で揉みほぐされていくと、身体がまるでベッドへ吸い込まれるように深く脱力していく。
天蓋ベッドの中央で、ダラリと裸で寝た状態で意識が心地よさでぼんやりとうすれていった。

ゆったりと心地よさに浸っていると耳元にリィネの囁きが流れ込んできた。
「大分緊張も、とけてきたみたいだしパウダーをしてあげる」
いったんベッドから離れて、何かをワゴン台まで取りに行ったリィネを、ぼやける視界で追いかける。

「パウダー・・・？」
「特別メニューの一つよ、香り粉と言ってとってもリラックスできるわ」
ぼんやりと浸る気持ちよさの中で口にした疑問に、リィネが答えると再びベッドへと戻ってきた。
何かを入れた銀色の面器を、枕元へとおいて両手を擦り合わせているのか、乾いた音が耳に響いてくる。

「ほら、身体に集中して」
リィネの声と共に、さらさらっと背中に何かが振りかけられた。
微かに冷たい感覚がしたと同時に、甘い香りが漂ってくる。
鼻梁にどこか心が緩むような心地のよいニオイが流れ込み身体が浮遊するような感覚を覚えていった。
その浮遊感を押さえつけるようにして、両手の平がスリスリと背中をこすってくる。

粉をすり込むように、手の平が上半身を撫で回す。
ある程度背中全体をまぶすと更に粉を追加で振りかけて再び手を使って擦る。
「ああ・・・」
全身が甘いにおいに包まれるような感覚の中、背中があたたかくなってくる。
何度も粉をまぶされ背中や腕、首など上半身全体に、追加ですりこまれると、ほやほやと全身があたたまってきた。

「ふふっ、いい感じ・・・」
そんなあったかい心地よさに浸っていると、鈴のようなリィネの声が耳に響く。
「はあっ」
同時に、背中に細い何かが這った。
背中からスルスルと指が撫で回す感覚に上半身がびくりとはねる。
「はっ、っつ」
もれる声をなんとか抑えシーツをぐっと握りこむ。

リィネの両手の指は解された上半身を蛇のように何度もはって、悶えさせようとしてくる。

その刺激は、完全にリラックスして癒やしを受け入れていたジェドに、妖しい感覚をもたらした。

（や、やばい・・・、なんだこの感覚は・・・）

背中から、首筋、脇の下へと流れるように撫で回されてゾクゾクとした、なにかが沸き立つような感覚が襲う。

「どう、気持ちいい？」

楽しむような声と共に、指先が脇腹をこするとビクリと身体が反応した。

「でもこれ、ここから下が本番なのよ・・・」

囁きと共に首の正中線をなぞるように背骨がツーっと指先でなで下ろされた。

指先が背骨を伝い腰までおりる。

「ひっ、おっ、」

腰布をめくりながら背骨のおわりまで指が流れる。

ジェドのお尻の割れ目、尾てい骨の先で指が静止した。

（なっ、おい）

きわどい場所他人にさわられたことなど今までにない部分を、指が抑えていた。

どこかこれまでとは違う官能の妖しさに警戒心がわく。

「背骨の終わりのここは、疲労が集中しやすいのよ・・・」

「っっっつ」

コリコリと、こねるように指先で刺激されながらささやかれると、言おうと思った言葉が出てこなくなった。

羞恥を感じるが、言葉でやめろとまでは言えない。

そんなギリギリのラインを、指先で弄ばれているような感覚だった。

しばらくそのまま尾骨の先をひととおりこねられると、ベッドへおさえるように、指先で骨盤が押された。

「んっ」
腰だけが、ベッドに沈むと股間が圧迫を感じる。
ベッドの弾力を楽しむように、指一本で腰をグイグイとベッドへ押しつけられた。
意外なほど強いその指圧に、お尻を揺らすように押されると腰が躍り出す。
「うっ」
「腰はもっと、ほぐさないと・・・」
さとすような声。
だがその言葉とは裏腹に、手指一本で下半身が遊ばれるようにベッドでゆらされる。
腰がいいようにあやつられて再び屈辱的な感情が再燃した。
その感情もすぐに指先の動きに翻弄されるように妖しい感覚に塗りかえられては流される。

指は、尾骨の先を押さえつつその身体の裏側、ジェドのいちもつへ小刻みな振動を送り込んできていた。
指先とベッドの間で、巧みに揺らされその刺激に股間がジワジワとあたたかくなる。
「ふふっすっごく、カタい・・・、ほぐしがいがありそう」
腰を揺らしながらそうささやく、リィネの言葉がまるで股間を指摘しているように聞こえる。

羞恥を煽られるような言葉だがはっきりと反発ができない。
(こ、こいつ、わざとか・・・?)
遊ばれているような感覚に、抵抗したいが送り込まれてくる気持ちよさがそれを押しとどめていた。

「ほらっ」
「ぐっ」
葛藤するその心を、一蹴するように指先がグリッと尾骨の下へ食い込んだ。
尾骨ではなくその下、はずかしい菊蕾の上に指が埋没する。
グリグリと指でおされ、揺れる臀部にパラパラと粉が振りかけられる感触

がした。
「お尻は、抵抗できないくらいユッルユルにしてあげる」

湿感が漂う低い声。
裏側のペニスに直接狙い撃ちしたような強い指先の振動と臀部に落ちるパウダーの感覚。
何かに捕食されそうな湿った空気感に襲われて、とっさにジェドは身体を逃がそうとした。
「お、おい、待て」
だが声は出せたが、身体はすぐには動けなかった。
「ひゃっ」
一瞬硬直した隙に、尻タブが指先で撫でられるとオクターブ高い声がもれてしまった。

「だめよ、動いちゃ、ここを柔らかくしなきゃ・・・」
お尻の割れ目を、指先で押されて反対側の手で尻たぶに粉がまぶされる。
低い声が、諭すように耳へと入ってくる。

「本番でうまく腰が振れないわよ」
「うぐっ」
性行為を連想させる言葉同時に、指先と手の平で押し込むように下半身をベッドに二度、三度と縦に振らされた。

「うまーく、ピストンして女を喘がせなきゃ」
クイクイと縦振りの腰の動きを模倣させるように、シーツに押しつけてささやく。

「こ・ん・な、風に」

「わ、わかった、わかったからやめろっ」
グイグイと押されてペニスが圧迫される刺激に、芯が充血していくのがわかり焦りがつのる。

雄の腰ふりを想起させる羞恥を煽るような指の動き。

「じゃあ、大人しくする？」

腰を上下させる動きをやめずに聞いてきたリィネにたまらずに無言で首を縦に振った。

「ん？」

「するっ、動かないっ、だからそれをやめろと言っているだろっ！」

腰のピストンの動きを再開させそうな雰囲気を感じて慌てて了承する。

情けないが、今の状況で暴れたところで、緩みきった身体はろくな抵抗もできそうにない。

それに拒否をして店を追い出される可能性もあった。

ここで、下手にいきり散らして娼婦の不評を買うより多少の羞恥を受け入れて好きにさせた方がまだマシだと思えた。

とにかく耐えて、本番まで持ちこたえてからそこから反撃してやる。

「じゃあ、大人しくなったところで、ゆっくりお尻をほぐしてあげる」

屈辱を飲み込んだジェドに、娼婦の声がふりかかる。

「うぐっ」

勝ち誇ったような声と共に、尻たぶに両手がはわされた。

粉がふんだんにまぶされたその肌を、なめるように両指がお尻をすべらせる。

（んっ、なんだ、ヤバいっ）

背中をされたときの数倍、ゾクゾクとした感覚が下半身に押し寄せてくる。

指はさわさわと双丘を撫でるだけ、だが感じる感触は今までとは段違いにジェドの背筋をふるわせた。

粉が臀部に染み渡るように、全体に指が這わされると肌が熱を帯びるようにじんわりとお尻がふくらむような感覚がしてきた。

（ひゃあっ）

その、ほんわりとしたお尻が突如、指先でぐにゃりと鷲づかみにされた。

「――っつ」
寸前の所で、声がもれるのを我慢する。

「あら？　っふふ」
口を閉じて耐えていると、小さな笑い声と共に、グニュグニュと尻タブを揉む指の動きが開始された。
十本の指が、こね回すように両尻を自在に動き回る。

芯からほぐすような、力強い指圧と全体を均等に這い回る抜かりなさ。
臀部のふくらんだ熱がこね回されて下半身がとけはじめるような未知の感覚。
「っん、ふー」
声をなんとか、抑えていたが鼻息が荒く漏れてしまう。

「我慢してるのかしら・・・、いいのよ好きなように声をだして？」
笑みを噛み殺してからかうように言ったリィネの両手が揺らすように尻の表面を手の平でふるわせた。
「だ、誰がっ」
ジェドの強がる言葉を無視するように、臀部が手首の根元を使って強く圧迫される。
「っっんっ」
「お尻、いい感じで緩んだわ・・・、我慢するならしてもいいわよ、どうせそのうちお口も緩んで声がでちゃうんだし」
落ちついた声で、挑発するような言葉と共に、お尻がブルブルと大きくふるわされた後、指先で軽くつまむように挟まれた。

「っっ――」
（あぐっ、この娼婦っ・・・・）
ユルユルにほぐれた両尻を、弄ぶように両手の指先でつまみながらプルプルと震わされる。
「ふふふ、なんだか子供のお尻みたいね」
意図的に羞恥を煽るような言葉に体温が上がってくる。

「貴族様は、いいお尻をもってるわ」
攻勢を強めるように、挑発じみた言葉をかけてはお尻を指先でもてあそんでくる。
普段なら決して見過ごすことができない貴族をからかうような言葉も、この状況では言い返せなかった。
下半身を漂う妖しい官能の疼き、抵抗できないほぐされた臀部の緩み。
認めたくないが、今起き上がったら自分の股間は醜態をさらす程、大きく膨らんでいるであろう。

「お子様おしり、ゆーるゆる♪」
反撃も抵抗もできず羞恥がつのりなぜか比例して股間があつくなる。
(ううっ、くそっぉ)
悔しさとともに明らかに期待している自身の性欲に心の中で、悪態がもれた。

「でも、子供は素直が一番なのよ」
「ひっ」
そんな心中をからかうように、指先がギリっと一瞬だけ尻たぶをつねると、ぱっと手を解放した。

「おまっ」
「はい、もっと素直にしてあげる」
そういいながら指先十本が、閉じた尻の割れ目に差し込まれるとガバッと左右にわり広げられた。

「ああっ」
完全に緩みきってまるで抵抗できない股筋を力強く両側へ開かれる。
グイッとうつ伏せのまま開脚されて、足を伸ばされたジェドはその開いた下半身の間にリィネが移動したことに焦りを覚えた。
「ちょっ」
貴族の下半身を制圧するように股の間で腰を下ろす娼婦。
「この奥が、期待していたことは、とっくにわかってるの」

股間から沸く期待を背後から指摘されると、内股を指先で撫でさすられた。
開いた股の内側を、両手で下から広げながら股間へと進めていく。
うつ伏せの足を開脚させながら、最後はお尻の谷間を開くように容赦なく股を割った。
「う、こ、このっ、体勢はっ」
うつ伏せで下半身をカエルのように広げられ顔から火が出る。

この体勢は、さすがに色々恥ずかしすぎる。
貴族としてもあるが、普通の男としてこの体勢をさらすのは抵抗が強い

「大丈夫よ、これはまだ前戯、うちのお客はこれをしてから本番に入るの」
動揺を隠せないジェドに、リィネは何でもないように答えた。
煽りのない冷静な言葉。
「そ、そうなのか？」
すがるような言葉には、その先の官能を受け入れたい欲望がにじんでいた。

「ええ、内側までしっかり緩ませるの・・・、ここもパウダーをふってっと」
「うっぐう」
言葉と一緒に、内股を中心に、さらさらと粉がふりかけられる。
粉がまぶされ流れるように、指先が肌を撫でさする。
「はっ、あうっんん」
内股の敏感な肌に、粉が両手でまぶされていく。
こするように素早く両手が、お尻の割れ目付近を滑っていき、その気持ちよさに一瞬声がもれた。

その声に、リィネの口元が大きく弧を描いた。
（捕らえたわ）
一歩ずつ進行するように、貴族の下半身を攻略する娼婦。
貴族の羞恥とプライドの狭間、その境界線を探っていく。

場慣れしていないこの貴族は、快楽と建前に極端に弱いと確信する。
そろそろ、堕としにかかっても問題はないだろう。
その下地はすでに、できあがっている。
リィネの頭の中では、すでにこの貴族が隷属される未来が鮮明に描かれていた。

舌を舐めた娼婦に見つめられて、ジェドのお尻が得体の知れない感覚に、ぞわりとふるえた。
（はあっ、はっ、なんだ今のは？・・ひっうう）
捕食される寸前の獲物が感じる生存本能への警鐘。

それを、内股に這う指先の動きが、塗りつぶすように巧みに舞う。
指先はついに尻間の深部、股の付け根へと進行した。
（そ、そこは・・・）
拡がった股尻の奥、そこには小さなすぼまりとその下には男の急所が隠されている。
指は尻の谷間をそうようにして、すぼまりを通過するとその下にあるシーツで抑えられている男の根本で止まった。

指先がついに下半身の中心、湧き上がる性感の起点へとたどりつく。
ベッドに押しつけられた熱いいちもつ、その先端から、なにかがじわりともれたのが自分でもわかった。
両手の指は、身体とシーツの間で半分だけ露出している男袋をサワサワとかるく撫で上げた。
「あっうっ」
息と共に声が出るのを、抑えることができない。
「ふふっ、貴族さま、お尻を持ち上げてみて？」
指先で、半分だけ見えている陰嚢の根元を押しながらからかうような声が聞こえてきた。

（なっ、そんな恥ずかしいことを・・）

「うっ、な、なにを、する？」
いくら期待しているとは、そう簡単に素直にはなれない。
「熱く期待しちゃってる、こ・こ、確認するの」
ズバリと期待感を見抜き、しっとりとしたこもった声で股下の睾丸の根元を爪先でくすぐるようにカリカリと引っかかれた。
「ひっ、そ、それ」
指先が誘惑するように、睾丸をひっかいていく。
その甘い指使いに、陰茎が充血しその先端がじわりと湿る。
「ほらほら早く、見せなさい」
せっつくように腰を持ち上げろと催促をうながす指使いに、下半身が反応してしまいそうになる。

だが、残った理性と貴族のプライドそして羞恥が寸前のところで腰の動きを押しとどめていた。
「や、やるなら、お前が手を使ってやればいいだろ」
このまま、リィネの言葉に従ってお尻を持ち上げるとペニスの先から出ている汁が垂れる姿を後ろから見られるのだ。
同じ羞恥を感じるとしても、まだ股の下に手を入れられて愛撫されたほうがマシだと思える。
「じ、自分から腰をあげるなんてできるかっ」
形だけでも抵抗して、プライドを守らなければ、自分は貴族の客だ、媚びるようなことをするつもりはなかった。

「そう、ならそのまま動かないでね」
拒んだジェドに背後から、やけに平淡な声が降りかかった。
その響きに、不安が芽生える。
気を悪くして、このまま何もしてくれないという可能性が頭をよぎった。
だがそんな考えをよそにリィネの指先は、あっさりと睾丸からはなれるとその上の尻間へとはい上がった。
「ここをしてほしいということかしら？」
そう呟きながら、指先は睾丸の上と恥ずかしいすぼみとの間で止まった。

「つっいっ」
普段、意識することのない肛門と性器との間にある陰部。
会陰部といわれるその隠れた場所が、リィネの細い指先でじんわりと指圧された。
中指と人差し指が、埋没するようにゆっくりと皮膚に沈んでいく。
じわりと妖しい感覚が、会陰から湧き上がった。
そのまま指先を動かされると思ったが、意外にも指は会陰を押さえたまま動かない。
お尻と陰嚢の間で、指が何かを待つかのように埋没しながら止まっていた。

(んっんんっ、な、なんだ?)
しばらく、そのままで止まっている指に疑問をもちだしたとき、じわりとした妖しい感覚が温かい熱へと変化していくのが感じられた。
それは、会陰を押す指先から流し込まれるように下半身全体へとひろがっていく。
今まで感じていた性感よりも濃い熱がジワジワと指先を起点に臀部の表面へと伝わっていった。
「あっ、あっ、な」
じんわりとした刺激のため声を抑えていたが、熱が臀部の表面に伝わった瞬間、ひりつくような感覚が、臀部を襲い声がもれた。
「な、なにをしてる?」
指は未だに会陰を押しているだけであり、臀部にはなにもさわっていない。
だが、お尻に感じる熱は、明らかに異常だった。

「なにも、・・・ここを押しているだけよ」
指を静止させたままリィネはとぼけたような声で答える。
「あっ、熱い、お尻が、下半身が、段々あつくなってっ」
痛みまでは感じないが、膨張するように熱が膨れていく。
更にそれは、下半身から、背中全体へとひろがっており身体が異様に熱を帯びていっているのが感じられた。
「なっああっ、なんだこれ?どうなってるっ」

臀部を中心に広がった熱が、上半身までひろがり全身が包まれるように火照ってきた。
「ふふっ、真っ赤になってる・・・ふーっ」
「ひゃああっ」
からかうような言葉と共に、お尻の表面が冷たい風に撫でられて腰が一瞬だけビクリとはねた。
「あら、動いちゃだめじゃない」
愉しそうな声で、会陰がぐりっとねじ込まれた。

「あうぐっ」
その突き刺すような指の刺激に、じわっと更に熱量があがる。
身体から湯気でも立ち上っているのではないかと錯覚するほど、身体が芯から熱くなっていた。
「お、おかしい、なんだこの熱は、いったい僕になにをしたっ」
強烈な体温の変化に、焦るように叫ぶ。
顔を持ち上げて、後ろのリィネを振り返ると指で会陰を押さえたまま顔をお尻に近づけていた。

「これ？ただのパウダーの効果よ　身体を火照らせて敏感にさせる効果があるの」
「な、そんなことっ――っひっ」
言葉の途中で、ふっーっと尻の谷間に息が吹きかけられる。
「普通にリラックスしていれば、ただの香りのいい粉なのに、フッー」
「それは、どういうっ、やあっ」
「だめよ動いちゃ、腰はあげないって自分で言ったでしょ」
息を吹きかけられ、跳ねる腰を押さえるように指で会陰をぐっと押さえつける。
そのたびに、じんわりとそこから熱が発生して全身へとひろがっていく。

「汗かいたでしょ？」
「？そ、それがなんだ？」
唐突なその言葉に、疑問がわく。

じんわりと会陰を指圧されて、ゆっくりと下半身を中心に汗ばんだのは確かだった。
「この粉は、汗と混じると肌に染みこんで発熱をうながすの」
会陰を押さえていない反対側の手が背中へとのばされていく。

「更に皮膚が敏感になる」
「ひっあ」
真っ赤に敏感になった身体へ背中が五本の指で、熊の手を作りながら引っ掻かれていく。
散々身体中に、パウダーをまぶされたのはこのためだったのかと、余裕のなくなった頭で考える。

（この娼婦、くそっ、ひっ）
軽く爪をたてたその指が背筋に、糸を引くよう下ろされると、ビクンッと背中が弓なりに仰け反った。

「あっこらっ、動くな」
「ひっい」
反動で浮いた腰にたしなめるように、指先が抑えるように会陰を押してシーツへと沈める。
（だあっ、だめだ、腰がっ）
「ふっー」
「はあっ、ひっ」
「だぁめ、お尻を浮かすな」

弄ぶように、お尻に吐息を吹きかけ、左手で背中を引っ掻いてくる指。
そのたびに、右手の指先で、会陰を刺激されベッドへと腰をおさえつけられる。

（や、やばいっ、前が・・・）
さらに腰が浮いて、シーツに戻されるたびに股間がこすれて、気持ちのいい感触を性器が襲う。

ペニスは明らかに大きくなり先から汁を漏らしている、だがそれを押さえつけるように指が会陰に食い込んでいく。

こうなることがわかっていたのか、リィネは自分から腰を持ち上げることを拒否したことを利用するように、腰を指先で拘束する。

するとその突き刺された二本の指が、ゆっくりと開いていったのがわかった。

「ちゃんと腰が動けないように押さえてあげる」

その言葉とともに、開いた会陰の指が折り曲がると肉を挟んで捻り上げた。

「いっひいいいっ」

ねじるようにゆっくりと肉を掴んでベッドへと押しつける。

指で会陰をつねられて腰が押されると、お尻に吐息が感じられた。

「ふっー」

「いっひっいっっっっ」

熱で敏感になっている谷間に吐息が流れ込む。

「ここも掻いてっと」

さらに追い込むように、背中に指がひっかかり爪をたてられる。

「やめっ、ひいいいい」

指は背中を流れ更に、尻へと爪を進行させる。

「だめよ浮かそうとしちゃ、恥ずかしい恰好を見せたくないんでしょ？」

からかうように言いながら、真っ赤な背中、臀部へと爪を立てて引っ掻いていく。

その間にも、尻間の中央へとフーフーと絶え間なく息を吹きかけて敏感な肌をくすぐるように煽られる。

（だ、だあああっ、もう・・・や、やばあいい）

敏感な身体を爪と吐息のみで責めたてられて、反応する腰を固定するように会陰を捻りながらベッドへと押しつけられて、すべての熱が股間へと集ま

ってくるように、ジンジンとペニスがふるえた。
（まずい、このままだと、でる、でてしまうっ）
「だ、だめだ、手をはな、離してくれっ」
ペニスの先から、じわりとじわりと汁が漏れて、このまま刺激され続ければベッドの上に擦られて射精してしまう。

この状況で惨めにベッドに射精するなどありえない。
とにかく、今の愛撫をやめさせなければと、首を持ち上げて振り返った。
腰だけをベッドに固定された振り返るように顔を向けると、口元に笑みをたたえた嗜虐的な表情のリィネと目が合った。

「いいわよ、でも腰は持ち上げたらだめよ？」
「なっ」
意地悪くそう答えた言葉に、思わず言葉が詰まる。

『自分から腰を浮かせるなんてできるかっ』て、誰の言葉かしら？」
からかうような言葉と共に、ゆっくりと手が会陰からはなれていく。
「っっっつ」
はなれた指が、撫でるようにジェドの内股をくすぐった。
「貴族なら自分の言葉に責任を持ちなさい・・・」
「――っ」
低い言葉と共にサワサワと臀部に指が舞う。
平民ごときにましてや娼婦に貴族を語られるなど普段なら殺意が沸くほどの屈辱だ。
だが、今はその言葉が、下半身を追い詰めるようにジェドの意思を拘束する。
押さえつけられていた腰は解放されすぐにでも、持ち上げたい衝動にからられたが我慢する。
その無防備な尻に、からかうように白い両指がサワサワと舞った。

「ぐっう」
「だめよ、もし腰を浮かせたら今日は肌を合わせる行為は、なし」

臀部を誘惑するような指先の愛撫とは裏腹に、リィネの言葉が冷たく響いた。
「なあっ、ぐっ」
突然条件を突きつけるように、お預けを宣言されジェドの頭に血が上る。
ここまで、我慢してきたのも男の本能をぶつけすぐにでもこの不遜な娼婦を喘がせるためだ。
「ぼ、僕は貴族だそっ、そんなっあああっ」
後ろを振り返る叫ぶジェドの臀部にがっしりと指先に爪がたてられた。
「だからなに？　私は自分の言葉も守れない男と寝られるほど安い娼婦じゃないの」
威を示そうとしたジェドに、冷たく揺るぎない声が爪とともに突き刺さる。
「あうっぐうう」
真っ赤になった尻たぶに十本の爪が、ギリギリと深く食い込んでいく。
「わかったかしら？」
「ひぎっ、わ、わかった」
圧迫する指の動きと冷たい言葉の重みに耐えきれずにジェドは必死でうなずくと声をあげた。
怒りもプライドも、敏感な臀部に食い込む痛覚には勝てない。
「そう、なら耐えなさい」
そう言うとあっさりと指を離したリィネは、再び背後からサワサワと指を臀部にはわせていった。
「ほらっ、ここはどうかしら？」
言葉のままその指先を、臀部からそのわり広げられた内股へと下ろしていく。
股の筋をくすぐるように細い指先が、上下に何度もツーツーとくすぐった。
「ひっ、ひっ、そ、それやめっ」
「ほおら、ガマン、ガマン」
押さえきれない笑みが混じるような声と共に、甘い指先が腰を浮かそうとするように誘惑する。

がに股で真っ赤になった臀部その谷間を、巧みに指先が尻を持ち上げさせようとなめ滑る。
「んふっーふっーっっつ」

(なっ、ひっ、だめだ、耐えろッ耐えろッ)
両手でシーツを掴み鼻息をあらげながら、腰を必死でシーツに押しつけるようにして耐える。
サワサワと股の筋、鼠径部を這う指は腰が勝手に浮きそうになるほど強烈だが、それでも先ほどのように強制的に快楽を流し込んでくるわけではない。
射精感は大分薄れているため意志を強く持てば指先の誘惑には耐えきれるはず。
歯を食いしばり痛みに耐えるがごとく、目をつぶるとその下半身の甘い愛撫に耐えるように臀部に力を込めた。

「そんな、力入れちゃっていいのかしら?」
尻を引き締めるようにこわばらせたその姿を、あざ笑うかのように愉しげな声が背後から響いた。

(あっ、こ、これは・・・)
そのリィネの言葉に、疑問を持つ前にお尻からゆっくりとした熱が沸き立つって来るのが感じられた。
「ああっ」
力を込めたことで意識が集中されたため、お尻を中心に火照るような熱い感覚が再び下半身を襲う。
あぶられるように異様に熱気を増す尻が、ジンジンと疼いた。

「馬鹿ね・・・、ほぅら・・ふッううっ―っ」
「ひっ、ひいいぃぃ」
冷たい吐息が、尻の谷間を撫でるように吹き抜けた。

「見せなさい」
同時に、指先一本で尻の割れ目がなぞるように下からすくい上げられる。

氷のような一本の筋が、睾丸の根元から会陰、お尻の中心をスーっと撫で上げる。
強烈な感覚に下半身はジェドの意思を無視して、指に従うようにお尻を持ち上げていった。

「はい、見せちゃった、ふふっ・・・淫乱」
「あっ、ああっ」
あざ笑うような言葉、その最後の単語がひときわ冷たく響いて耳朶をふるわせる。
自分の意思とは無関係に腰が勝手に持ち上がってしまい、その痴態を背後から指摘されてぶるりっと勝手に尻がふるえた。

「あっ」
「動くな」
鋭い声と共に、
とっさに腰を落とそうとしたジェドの股間、陰嚢の下に指先がグリッと押し込まれた。
「ひうっ、な、あ」
爪をたてて指先一本で、腰を浮かせたまま固定される。
「ふふっ、はしたない・・・、先っぽが濡れてる・・・」
羞恥で顔を隠すようにうずめるジェドの後方から、嘲笑するような声が聞こえてくる。
それが、真っ赤にふくれて先が濡れた男根を指摘したものだということは明白だ。

「真っ赤にいきりたって、・・半分皮が被ってるわ」
吐息が尻にあたり、リィネが顔を近づけた自身のペニスをじっくりと観察しているのがわかった。
指先での快楽に屈して、醜態をされされる羞恥。
さらにペニスを観察されて煽られジェドの脳内に様々な感情がわき上がる。
屈辱、羞恥、混乱、・・・そして快楽。

「ふふっ」
そんな追いつけない感情に翻弄されるジェドに到底、許容できない言葉が呟かれた。
「態度だけじゃなく、こっちも半人前なのね」

ツンっとペニスが揺れる感覚。
軽蔑まじりの冷めた言葉と、ぞんざいに扱われた陰茎。

侮辱以外の何もでもないその行為を理解すると同時に、ジェドの感情が一気に膨れ上がった。
「いい加減にしろ！　、誰が半人前だとおぉ、このクソ淫乱しょ――っ」

顔を上げて感情のまま、振り返ろうとしたその瞬間、
股間の中央、その生殖器の真ん中がズンっと鈍い衝撃を受けた。

「っっがああっ」
ギリギリと陰嚢が、引き絞られるように圧迫される。
「少しは自覚しなさい・・・、いい？あなたは半人前なの」
強く睾丸が圧迫されながら、背後からリィネの冷淡な声が聞こえる。
顔を真っ赤にさせ怒るジェドとは対照的に、その態度は氷のように冷たい。

「いっ、いたあっ、や、キサマ、貴族にこんな事をしてただですむと思うなぁ」
「・・・だまれ、口を開けば貴族、貴族ってあなた自身は何もできない男でしょ？」

股間を襲う強烈な鈍痛と共に、心をえぐるような辛辣な言葉。
「女をリードできず、快楽に負けて自分の言葉も守れない」
「うぐうう」
「指先一本で下半身を弄ばれ、先っぽを泣かせながら勃起させる」
嫐るよう低い声が、耳をふるわせる。

男のプライドを根元から折るようキツい言葉とギリギリと食い込む睾丸への刺激。

それでも、ここで屈すれば平民に負けたことになる。

「そ、それは、お前がっ―っぐうう」

なおも反抗しようとするその言葉が、睾丸への衝撃で止められた。

「なら、証明しなさい」

「うっぐううっ、なっ、はあっ、はあっ、な、何を・・・?」

一瞬だけ強く握りこまれた陰嚢が、ゆっくりと解放されジェドは息を整えるように吐き出しながら問い返した。

「半人前じゃないってことをよ」

憤る気持ちをおさえて、ゆっくりと顔をリィネへと向ける。

「これ」

そんなジェドを、無表情のまま見据えた銀髪の女は白い人差し指を一本だけピンっと上に立てる。

「この、一本であなたをおもらしさせるわ」

「なっ」

あまりにも、屈辱的な言葉。

だがその挑発じみた言葉もこれまでの行為を考えると、ただ馬鹿にしているだけではない、強い確信の響きが感じ取れた。

しかし次にでたリィネの言葉に、ビクリと肩がゆれた。

「我慢できたら半人前の言葉は取り消して、ちゃんと抱かれてあげる」

「はあ、はあ、本当だろうな」

うつ伏せのまま肩で息をしながら、顔だけをリィネに向けてにらむ。

一度は腰を浮かせて負けてしまったが、あれは不意をつかれたからにほか

ならない。
しっかりと身構えて予想していれば指一本の愛撫で射精するなどありえない。
生まれてこのかた、ここまでコケにされて遊ばれたことはない。
男を、貴族をなめた事を絶対に後悔させてやるという原始的な怒りがジェドを奮い立たせてくる。

どこか活力を取り戻したようなその態度を、面白がるように娼婦は不敵な笑みを浮かべた。
「ええ、本当よ・・・ただし、もらした時は半人前だと認めなさい」
「ああ・・、わ、わかった」
釘を刺すように低い声でそう言い放つリィネの迫力にジェドは、喉をゴクリと鳴らしながらも、負けじと再びにらみつけた。
そんな表情に、リィネは口元をつり上げてあざ笑うと小さく囁いた。
「しっかり味わいなさい、指一本で負ける気持ちよさを」

ねっとりと、鼓膜をふるわせるような声が響くと持ち上がる腰の中心に指先がツンっとふれた。

ジェドは顔を戻して、シーツに押しつけるように伏せると小さく呼吸をして目をつぶった。
指がぐにゅりと睾丸の根元へと食い込んだのが感じられた。

(ぐっ、やはりそこか・・・)
性感の根元を刺激するような甘い疼きが陰嚢に沸き上がる。
だがそれは、先ほどまで散々弄られてきたためか来るのがわかっていれば思ったより耐えられそうな刺激だった。
クニクニと揉み込むように、何度も指先で会陰を揉み込まれる。
しばらく、同じ愛撫を繰り返されていくとジェドにも指先から伝わる意図がなんとなくわかるようになってきた。

(こいつ、睾丸からペニスへと快楽を送り込むつもりだ、そのために根元か

ら性感をたかめるつもりか・・・）
その予想通りリィネの指は、執拗に何度も会陰を揉み続ける。
性経験の薄いジェドでもさすがに、この後のリィネの愛撫が予想できるようになっていた。
疼くような刺激を感じながら、ジェドはこの後続くであろう睾丸への愛撫そしてペニスへの責めに耐えきれるか考えをめぐらせた。

（くそっ、このまま長引けば・・・）
今までじっくりと性感を高められて、射精寸前まで追い込まれていたペニスは、時間をかければいずれは放出しそうな予感があった。
指一本でイクわけがないと思い込んでいたが、この指使いを感じれば歴戦の娼婦がそんな甘いわけではないと思い直す。
先ほどの態度もそれがわかっていたから、あんなに自信に満ちた態度をとれたのではないか。

そこまで考えたジェドに一つの考えがひらめいた。
（時間をかける・・・？　自信がある？・・・これしかない！）

「おい、娼婦」
この考えがうまくいけば、勝てるかもしれない。
それに、高圧的だった今までの自分の態度が利点になる。
「なにかしら？」
「僕を射精させるのに、何年かけるつもりだ？」
あえて顔を向けず下を向いたまま、ジェドは挑発的に問いかけた。
その言葉に、ピタリと会陰を揉んでいた指の動きが止まる。
どんな感情が相手に流れているかはわからない、しかしこの女の性経験への絶大な自信を考えると戦略はうまくいくはずとジェドは考えた。

「醜女だろうと太った女だろうと、こんな状況ならいつかは射精させられるぞ？」
貴族としてあまり声高に言えることではないが、今は背に腹は代えられない。

「下手な商売女でも値はつくだろ？　男の生理ってのはそういうもんだ」
「なにが言いたいのかしら？」
感情の読み取れない平坦な声が背後から響く、その間も会陰はおされ続ける。
「いや？、いつになったら、おもらしとやらをさせてくれるのか聞いてるだけだ、日を跨いだ後か？」
気持ちよさに耐えながら最大限に挑発的な声を心がけて、ジェドは見下すように言葉を返した。
指が会陰を押さえたままゆっくりとした静寂が流れる。
臀部を女に向けたまま、あられもない恰好。
しかしその羞恥すらも、忘れたかのようにジェドは息を止めてリィネの返事を待った。
「じゃあ、逆に聞くわ、いつまでに射精させればいいのかしら？」
（きた！）
予想通りの答えが返ってきたことで、ジェドははやる胸中を押さえるように努めて平静な声をだした。
「お前はプロだろ？じゃあ僕が、二十の呼吸をする間にいかせてみろ」
（ははっ、バカな娼婦め、これでいくらでもこっちの都合に持って行ける）
考えた筋書き通りに挑発に乗って、自ら問い返してきたリィネに心の中であざ笑いながら勝ちを確信する。
実際には、六十の呼吸の間でも耐えられるだろう。
それを二十に短縮したのは、なんだかんだ言いつつ条件を変えようとするであろう娼婦に、勝負そのものをやめさせて立場を有利にするためだった。
「無理なら―」

「いいわ」
は？、
と聞き返す間もなく、ズクンと会陰に衝撃が走った。

「ほら、呼吸をはじめなさい、早くしないともらすわよ？」

（なっ、なにをっあああっぐ）
甘い陰嚢への刺激を感じて焦るように息をする。
「ほーら、数えてあげる、いぃーちい、にぃーいい、さぁーんん」
始まったカウントに合わせるように、ぐにゅりぐにゅりと睾丸に指先がのめり込んだ。

（こいつっ、本気かっ？）
陰嚢から睾丸へと流れるように指先を滑らされ性感が急激に沸き立つ。
だが、最初は戸惑ったその刺激だが指の動きは予想通り会陰から睾丸への流れるような動きだ。
気持ちはいいが想像の範囲内の快感。
来る刺激がわかっていれば、我慢できる。

「なぁーなあ、はぁーああちい」
それにリィネはカウントを無駄に引き延ばそうとしたりせずに、ちゃんとこちらの呼吸に合わせて声をだしていた。

（だが・・・ぐううっ、この指の動き、気を抜いたらもれる）
それでも、陰嚢をくすぐりながら爪をたてて湯だつような性感を掻き回すような指使いは巧みで、歯を食いしばって耐えなければ、すぐにでもっていかれそうになる。
しかも歯を食いしばればその分呼吸ができずに愛撫は長引いてしまうというジレンマ。
快楽に耐えるたびに、呼吸がやけにゆっくりと感じられてきた。

「ひっっぐう、くっううう」

口から涎が垂れるのもかまわず必死で時が過ぎ去るのを待つ。
指はついに煮え立った睾丸から、竿へと移動し始めていた。
睾丸の中央を一筋の線が、欲望の種を押し出すように爪をたてながら糸をひく。

「じゅうーにい、じゅうーさぁん、ふふっ、お汁が垂れてきた」
ビクビクとふるえるペニスの先から、タラタラと滴がこぼれ落ちていくのが自分でもわかった。
そのガマン汁が、精液へと変わることがないように祈る。
だが脳は快感を求めるように、睾丸から白い迸りを吐き出させようと命令を迫る。
そんな強烈な快楽への渇望を後押しするように、一本の指が無慈悲に甘い誘惑の道筋をひいていく。

「ひぎっ、ぐっ、だあっ」
陰嚢がひときわ強く爪先で引っかかれると尿道に沿うように指が真っ赤なペニスの裏筋を引っ掻いていった。

(耐えろ、耐えろ、もうすぐだ)
「じゅうーろく、じゅうーなな」
決壊する流れを押さえ込むように、尿道を引き締めるように肛門へと力を込める。
ぶわりっ、ひときわ陰棒が大きく膨張する。

自分でもその白い迸りが、尿道をゆっくりとながれペニスの真ん中あたりでとどまっているのが感じられた。

「じゅうーはぁち」
だが、後二呼吸、ここさえ耐えきれば勝てる。
ジェドは最後の踏ん張りとばかりに、お尻に力をこめて息を吸った。
射精をこらえるために前立腺に力をこめて肛門を引き締める。
白い指先がペニスの裏筋から糸を引くように尻の谷間へと撫であげた。

瞬間
「イけ」
突き刺すような冷たい声と共に、後ろのすぼまりにスルリと何かが入り込んだ。
「お？っあがあああああ」
グリッと陰嚢の奥が内側から引っ掻かれた。
同時に、脳内が明滅するように発光する。
追いかけるように臀部を中心に暴発するように強烈な刺激が襲いかかった。
ぶぴゅっと腫れ上がった傘の先端から何かが噴き出す。
「ひぎぎいいいいっあああああっあああっあああ」
男の下半身で上下にふるえていながら真っ赤にふくれた淫棒の先からどぷりと大量の白濁がもれる。
考える余裕すらない、ただ喉から喘ぎ声がもれて、こらえることができない。
「はい、おもらし」
淡々と事実を告げるように呟かれた声。
言葉を理解するまもなく、いきりたつペニスからはドロドロと白い精液が流れおちていくのが感じられた。
放出の解放感がない、悔いの残るような感覚。
「これが、敗北の味よ・・・たまらないでしょ？」
異様に低くこびりつくような妖艶な声が、ボソボソと耳元で呟かれた。
気がつけばリィネが、意地悪く笑みを浮かべながら添い寝をするように顔を近づけていた。
「ひ、あう、こ、こんな」

右手を伸ばして、持ち上がった腰の中央、流れ落ちる精液をかき出すように指先一本で竿をカリカリと引っ掻かれる。
その刺激は尿道に残る精液を、垂れ流させるだけ弱いもの。
気持ちいいと思える快感は、一切なく逆に切なさ覚えるような焦れったい物足りなさが募っていく。
何が起こったのか理解できるのは、精液をもらしてしまったという事実のみ。

間違いなく時間内である二十呼吸の前に射精してしまった。
ペニスからボタボタと情けなく流れおちる精液。
それをあざ笑うかのように、白く細い指が半勃ちの竿をからかいながら、爪をたてる。
パクパクと尿道口が開き、そこから白い滴がもれるたびに焦れったさと情けなさが増幅されていった。

「も、もうやめっ、ひいいっ」
抗議するように声をあげたジェドの亀頭の根元、くびれに被る包皮がひねるようにつまみあげられた。
裏筋にある包皮小帯がキュッと締め上げられる。

「半人前のおもらしオトコだと認めろ」
耳元で低く冷たい声が鼓膜に響きわたった。
有無を言わさない強い強制力を持った言葉に、身が縮み上がる。
「わっ、わかった――っひ」
更に、包皮が強くひねりを加えられると、鈴口に爪が入り込んだ。

「言い方・・・」
ただそれだけの言葉。

「はっ、はい」
それだけで、ジェドは立場もプライドも忘れて反射的に服従の言葉がもれてしまった。

はっと気がついた時には、つねられた包皮が解放されており、指が亀頭の下の傘に巻き付いていた。

「いいコ・・・、じゃあご褒美に少しだけ、気持ちよくさせてあげる」

今のは違うと抗議の声をあげようとする前に、これまでとは違う甘い言葉が耳元で囁かれた。

「あっあうううっ」

同時に、ペニスからじれた感覚が、薄まるとドプドプと大量の精液が流れ落ちるのがわかった。

わずかだが、解放感のある射精。

股間をみると、輪っかを作ったリィネの人差し指と親指が亀頭の根元をキュキュと擦るのが見て取れた。

「あぁぁあう」

ぴゅるぴゅるっと精液が漏れるたびに微かに甘い刺激が股間をふるわせた。

「今日は、これで満足しなさい」

尿道に残った精液がある程度吐き出されると、スッとリィネの指が離れていった。

「あうっ」

ジェドは何も言葉が出せずだだ、名残惜しいような気持ちが股間に残る。

身体を寝かせて腰を浮かせたままビクビクお尻をふるわせるジェドの耳に小さく吐息が吹きかけられた。

「ひっ」

「終わりよ、次はお客としてきなさい」

ビクンと身体をふるわせるジェドを、愉しそうに見つめながらリィネは甘く囁いた。

「そしたら〝ちゃんと〟相手をしてあげるわ」

そのままリィネはゆっくりと起き上がると誘惑するように四つん這いになって小さなお尻を軽く揺すると起き上がった。

呆然とするジェドに一瞥もくれず立ち上がるとゆっくりと部屋を後にした。

残された貴族の青年は、放心状態のまま退店の鈴が鳴り響くまでベットで固まっていた。

その股間は、射精直後にもかかわらずヒクヒクとふるえており、臀部の奥はジンジンと熱い疼きが残ったままおさまりそうになかった。

お試し版、お読みいただきありがとうございます。

製品版は、二日目、三日目、エピローグと更に濃厚なHシーンが続きます。

グッと来た方 、完成品もよろしくお願いします。